

# い・ぢ・ん・ぢ

赤石 元子

この頃、私は子どものいぢごぢについて思いをめぐらせている。

自園の研究テーマに迫る窓口としていぢごぢの場面をとりあげているからなのだが、このことが日頃の私の子ども理解や援助の仕方を揺さぶっている。

“いろいろ”を楽しんで

一緒に暮らせるように

幼稚園は、子どもにとって楽しいところでもあるが、また結構大変なところでもあると思う。「みてみて！」と目を輝かせる姿、仲間同士で頭を寄せ

合って話し込む姿、怒りながら泣き、泣きながら笑う子どもの姿……ワクワク・ドキドキする暮らしの場である。

怒ったり泣いたり、物を取り合ったり、言い合ったりするいざこざもあちこちで起こる。ありのままの自分を出して、ぶつかりあう。いざこざは、自分と相手の違いを知る貴重な体験だ。"違い"を知り認め合えるように、"いろいろ"を楽しんで一緒に暮らせるようにと願っている。

とはいえ、現実の保育の多忙さに追われる私は、できるだけいざこざが起らないように先に先に手をうったり、時には感情的になったりして、いざこざをおおらかに受け止められないことが多い。また「○ちゃんは嫌な気持ちだよね」などと子どもの気持ちを言葉にして代弁し、仲介し、整理したりもする。こうしてかかわりながらも、どこか子どもとかみ合わない感じがあることがある。これは大人

の自己満足にすぎないのではないかと思うことがある。

踏みとどまってよく見ていると、子どもは、いざこざの中で悩みもするが結構たくましく乗り越えていくことに気付かされる。もつと子どもを信じてまかせてもいいのではないか。言葉ではなく体で実感できるようになかかわりが必要なのではないかと思うのである。

### 遊びの中で・体で感じて

三歳児の様

子を見る機会があった。

Aが箱ブランコを思いっきりこいでいる。スピード



がたまらなく快感という様子。一緒に乗っていたBは、そのスピードがだんだん恐くなり「止めて」と言う。何度か言うが、Aは「だめ」と言い返しいつこうにスピードを緩めない。Bは泣き顔で「おりるうー」と叫ぶ。するとAが「お昼のサイレンが鳴ったら止まるよ。お昼になったら公園に着くから」と言う。Bはさっと泣くのをやめ「お昼のサイレン鳴る？」と心配そうに聞く。Aは「鳴るよ」と穏やかに答え、スピードを加減しブランコを止める。Bはブランコを降りて砂場で遊び始める。

子どもの解決の仕方は、何と身近な遊びの中にあるのだろう。あんなに泣き叫んでいたのに「お昼のサイレン」で通じ合い、ピタッと納得して泣きやむ。きつといつも「お昼のサイレン、ボンボン」の合図を楽しみながら遊んでいたのだろう。子どもが遊びの中でイメージをゆき交わせ、納得して折り合いをつけていく姿は見事だなと思う。同時に、体

の感覚を通して自分と相手の感じ方の違いを知っていく。Aは、自分もつとスピードを出したいけれどもここらでやめようというところを自分で判断している。Bは、ちょっと恐れけれど我慢しようと自分の許容範囲を広げている。互いに違いを感じつつ折り合いをつけている。体を使って遊んでいること、遊びの中でイメージをゆき交わしていることがいざこざを乗り越える力になっているように思う。

もしここで私が介入していたら、「Bちゃんが嫌がってるよ」と言葉で気持ちを代弁していたかもしれない。Aはブランコを止めるかもしれないが、それは自分で感じ判断して行動することから学び得たものとは異なる。相手の気持ちに気付かせようとする大人の教育的な介入が、むしろ子どもの生きる力や関係性を弱めてしまっても多いのではないだろうか。もつと、遊びに目を向け、体で感じ合うことに注目しなければと考えさせられる出来事だっ

た。

### 仲間関係・ルールのある遊び

五歳児になると、子どもたちは、その遊びの楽しさを求めて友達と集まるようになる。友達と一緒にルールのある遊びを楽しみながら互いの距離のとり方を学んでいく姿の中には、今まで私がとらえていた以上に葛藤があるように思う。

私の担任している子どもたちは、毎日のように鬼ごっこやドッジボールをしている。最近強く思うことは、ルールのある遊びであっても、仲間関係に色濃く支配されているということである。仲間の性格や特徴がよくわかっていてるので、優位にある子どもがルールを勝手に変えたり、鬼役の子が誰であるかによってルールが容易に変更されるなど、遊びが仲間関係に大きく影響を受けている。

六月の高鬼で、Cは、仲のよい友達と自分は狙わ

ないように鬼のDに告げる。Dは仕方がないという表情で、狙う子を限定する。しかし、鬼が狙う子を限定した高鬼は、活気に欠ける。Eは「おもしろくないよ」とつぶやくが、正面きっては言わない。参加している子どもたちは、Cの主導権の基に動く遊びの中に自分なりの楽しさを見つけようとし、Cの言動に期待をもってかかわっているようにも見える。敏捷で面倒見のよいところのあるCの魅力で遊びが進んでいる一方で、Cの力に支配される関係に不満も見られる。文句を言わないのは、仲間との関係を保ちたいという気持ちがあるのだろう。この日は遊びの仲間に入れてもらい、Eの「みんな走らないからおもしろくない」という言葉を受けて、「走ろう!」と言って子どもたちを誘いだし、とにかく走る。すると、鬼のDは誰彼問わずに追いかけ始め、逃げる・助けるなどのやりとりを楽しむ幼児が増えてきた。

九月、エンドレスリレーを楽しんでいたが、Cが自分のチームが勝っている時にゴールテープを出し勝敗をつけるようになる。Fたちが「ずるい」と言うがCは譲らない。リレーは中断。するとDが「もう一回やろう！」と声をかけ、みんながスタートラインに並び始める。Dの言動でその場の雰囲気が変わり、リレーは再開した。

遊びが人間関係に支配されすぎると不自由になり停滞する。表だつたいざこざにならない時ほど、心は葛藤している。本来、不満に思うことがあれば対等に言いあえることが基本だが、関係は微妙でなかなか複雑である。こういう時に、いつでも正面きつて対決するとしんどいということも子どもは体験を通して知っていく。言いあうばかりでなく、他の方法を選びだすというたくましさが求められている。遊びを再開する、体を動かす、時には一人になるなど、子どもが新たな視点を見つけて乗り越える援助

が必要である。

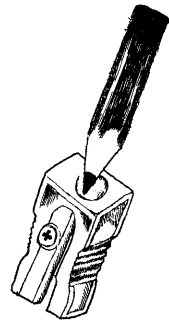
心を解放し、遊びの楽しさを体得することが、

友達との絡んだ

糸を解きほぐす原動力になるように思う。

十一月にはドッジボールが盛んになっていた。

「ドッジボールをしたい」と仲間入りする子どもが増えてきている。相変わらずCは、友達がボールをとるとそれが相手チームであっても「おれだぞ、渡せ！」などと叫び、ボールを自分にパスするように指示している。「なんでCにはっかかり渡すんだよ」とDが文句を言うが、Cは止めない。するとEが、「Cは、言っても言ってもだめなんだ。ぼくが当たなのに、透明人間だから出なくていいって言う」と涙声で訴える。ゲームは一時中断し、みんながEのまわりに集まってくる。Cは「Gが僕のボールの当



たらないところにはっかり逃げるからいけないんだ」と泣きながら言い返す。するとHが「Gは悪くないよ。ボールが当たらないように逃げるのはいいことですよ。当たらなくても、またすぐ投げればいいんだよ、ゲームなんだから」と言う。Dも「透明人間になると面白くなる。Eは悔しいと思うよ」と言う。

こんな場面はこれまでもこの後もたびたびあった。日頃Cの意向に沿うことの多い子どもが、平等なルールがあることで遊びが楽しくなることを体得し、自分たちの考えを主張するようになってきた。大好きなドッジボールを友達と一緒に楽しみたい気持ち強いCは、友達の主張が身に沁み、少しずつ自分の行動を調整するようになってきている。

すっきりとはいかないジグザグの長い道のりの中に、あのワクワク・ドキドキ感がある。楽しくも厳

しいこの大勢の暮らしの中で、友だちのよいところも弱いところも知ってつき合うようになっていく。そして、何よりも自分のことを振り返るようになる。いざこざを経験しながら自分と相手との世界を広げていく子どもの姿の中には、たくましさや希望がある。

子ども同士の関係の糸は、時に強く絡み合い解けにくくなっているようだ。また一方でなかなか絡み合わないという様相も見せている。相手との違い、適度な距離のとり方、折り合いのつけ方を学ぶチャンス子どもから奪ってはならないと思う。

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園)